

20代サラリーマンが週末猟師を続けているわけ

サラリーマンをしながら週末猟師をやっています。

「なんでやっているの?」「鉄砲使うの?」「解体して食べるの?」などなど、沢山の質問を受けます。地域によっては馴染みが薄い存在かもしれないと感じています。猟師は好奇心の対象になる一方、あまり良い印象を持たれないことがあるのも事実です。やっていることは残酷ですし、仕方ないことだろうなと思っています。世の中色々な意見があります。

そんな賛否両論を起こしやすい猟師が今回の雑誌に書くことになったのは、ボランティアという側面で猟師について書いてほしいと依頼を受けたためです。

「狩猟とボランティアって結びつくの!?!」と思う方もいるでしょう。そんな方に一読していただき、猟師も少しは世の中の役に立っているんだな、と感じてもらえればと思っています。

まずは自己紹介

平日はサラリーマンとして会社に勤めながら、土日は狩猟に明け暮れています。

狩猟を始めたきっかけは Chad Mendes という格闘家でした。インスタグラムに仕留めた猪の写真を上げていて、衝撃を受けたのを覚えています。ここで初めて狩猟という存在を意識するようになりました。

その後、ジビエ料理屋に行き、猪肉を食べるとあまりの美味しさにまたもや衝撃を受けました。当時、大学の体育会系で部活動に励んでいた私としては、自分でお肉(タンパク質)をとれるなんて狩猟という趣味は最高だなと考えていました(振り返ってみると、非常に浅はかで恥ずかしいきっかけですね)。

「狩猟をやらない手はないな…」
そう思い、部活動引退後、大学の狩猟サークルの門を叩きました。



会社員/猟師
森 裕紀

[もり・ひろき] 1996年、千葉県生まれ。中学時代をマレーシア、高校時代をシンガポールで過ごす。早稲田大学卒業後、伊藤忠商事株式会社に入社。師匠の庄司さんとその猟友と共に、猟期の間、週末猟師をしている。

そして、サークルを通じて知り合ったのが私の師匠、庄司さんです。

庄司さんは、年間250頭ほど獲物を仕留めている凄腕の猟師です。私が庄司さんのところに通い始めて4年が経ちます。たった4年ですが、庄司さんとの狩猟体験は話し出すとキリがありません。庄司さんのもと、様々な体験をし、様々な猟師と出会い、沢山の獲物に恵まれてきました。たった4年しかやっていない若輩者が、狩猟について書くのはおこがましい気もするのですが、そこはご容赦ください。

獣害って?

狩猟とボランティアの関係性を理解してもらうには、まず「獣害」について説明する必要があります。

獣害とは獣が起こす被害全般を指します。熊が学校に現れて人に怪我を負わせた、といった話は一つの獣害です。また、カラ

